

---

# **些細な事。**

鴨居 青

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

些細な事。

### 【著者名】

N4090Y

### 【作者名】

鴨居 青

### 【あらすじ】

些細な事。そこから恋が始まった。

## きつかけは些細な事。 1

きつかけはほんの些細な事だった。

いつも怒つてばかりのあなたが、私を褒めてくれたから。  
満面の笑顔で笑つて「お前ならやれるって分かつてた」って言いながら頭を撫でてくれたから。

その後に「すまん、セクハラになるな」って慌てて謝つてきたのに  
も何故か和んでしまったから。

そんな、些細な事。

「竹原あーこっちに来い！」

「は、はいっ！」

今日も課長の怒鳴り声が営業企画部に響く。

周りの同僚たちは何時もの事と分かつてているので特に気にもせず机に向かっている。

ただ一人、怒鳴られた本人である私を除いて。

「竹原、今度は何やつたんだよ」

向かいの席にいる同期の徳永がパソコンの画面から視線を逸らさず  
に小さな声で私に尋ねてくるのだけど、私にも何故課長がご立腹な  
のか分からなかつた。

「わ、分からないよー。」

そう言いながらも足は課長の席へと向かう。

席に近づくにつれて課長の怒氣を含んだオーラが肌にびりびりと伝  
わってくる。

課長は殺氣だけで人を殺せると思つ。そんな事を言つたら課長に何  
言われるか分かつたものじやないけど。

課長の席に着くと課長は私を見て書類を差し出した。

「お前、これ見てみる」

そう言わされて差し出された書類を受け取り、目を通してみる。

目を通して直ぐに何故呼ばれたのかが分かった。書類に記載された金額が明らかにおかしい。

「申し訳ありません！すぐ直します！」

「俺が目を通しておいたから良かつたものの、取引先に見せてたら大変なことになつていたんだぞ。お前は注意散漫なんだよ。こういうミスが多い。気を付ける」

課長はそう言いながら眼鏡を外すと目頭近くの鼻骨をつまむ様に揉んでいる。

ここの中課長は残業続きで疲れているようで、余計に申し訳なくなつてしまつた。

「お手数おかけして申し訳ありませんでした」

「入社してからもう半年以上経つんだから、なんでそういうミスが出てくるのかきちんと考え方」

課長は眼鏡をかけ直すと、他の書類に目を通して始めたので私は一礼して自分の席へと戻つた。

この職場に就いてもう二ヶ月経つのにこんなミスをやらかしてしまう自分の駄目さにへこみながら、元のデータを呼び出していくと「竹原また入力ミスつたの？」と向かいの席の徳永が話しかけてきた。

「うう…それ以上は何も言わないで。今自分の駄目を加減にへこんでいる所なんだから」

パソコンの画面に出てきたデータを見ながら間違つてている金額の部分を直していく。

「へこむのもいいけど、今回は課長が先にミスを見つけてくれたんだから良し、と考えて次に繋げないと。いつまでへこんでいてもしようがないだろ？」

「そなんだけど…。」

徳永が言いたい事も分かる。取引先の人に目を通して直された前にこちらで直ぐに気づいたのだから良かつた。と考えて、入力ミスを繰り返さないようにすれば良いだけの事なのだ。

けれど、どうしても上手く気持ちを切り替えることが出来なかつた。

「…お前今日飲みに行くぞ、飲み」

「へ？ 飲み？」

突然の提案に一瞬びっくりして聞き返したのだけど、徳永は特に気にする様子も無く

「いつまでもうだうだ言つてないで気分転換でもして気持ち切り替えろ」

そんな事を言つてくる。徳永なりの気遣いらしく、それがとてもありがたかった。

私は茶化すように

「申し出はありがたいんだけど、私に用事があるかどうかも聞かないの？」

と言えば徳永も分かっているようで

「彼氏もない奴が週末どこにいくつてんだよ。いつもの居酒屋でいいよな。」

なんて言つてくる。

「はいはい、そうですよー。仕事で手一杯ですから彼氏作る余裕なんてありませんし、つと出来た」

「お、出来たか。チェックは怠るなよ」

「今度は大丈夫。ちゃんと確認したから」

プリンターが修正したデータが印刷された紙を吐き出したので課長の元へと持つて行く。

「よし、ちゃんと修正出来てるな」

「本当に手数お掛けして申し訳ありませんでした」

「今後もチェックを怠るなよ。ああそつだ竹原、お前今度の水曜の夜明けておけよ。勝田部長への接待があるからな。」

「…勝田部長、ですか？」

私は思わず言い淀んでしまう。この勝田部長にはあまり良い思い出が無い。

勝田部長の元へ仕事の打ち合わせで行くといつもセクハラまがいの

事を言われたからだ。

それも会う度に言葉が酷いものになつていつている。

その事は徳永以外誰も知らない。言える訳が無かつた。

「なんだ、勝田部長と飲むのが嫌なのか？」

訝しげに見てくる課長に私は慌てて首を横に振り

「いいえ、違います！つい先日お会いした時にはそういう話をされなかつたので」

びっくりしちゃって、と笑いながら言つと課長は納得してくれたようだ

「ああ、ついさっき電話で話しててそういう流れになつたからな」

「分かりました。水曜の夜は空けておきます」

そう言ってぼろが出ない内にそそくさと自分の席へと戻つた。

折角徳永が気を使ってくれて浮きかけていた私の心は簡単に地の底へと落ちた。

## きっかけは些細な事。2

「何、あの勝田部長と飲むの？」  
そう言いながら徳永は枝豆を鞘から押し出している。

「そりなんだよーつ。徳永あ、私どうしたらいいんだひー」  
私はテーブルの上に顎を乗せて下唇を突き出していると、鞘から出した枝豆を徳永が私の皿の前に差し出すので、口を開けると枝豆が放り込まれた。

「俺も一緒にに行けたらいいんだけど、全然関係無いからなあ」「そう言ってもらえるだけでも嬉しいよ。ありがとう。ってかなんかいつも気を使わせちゃってごめんね」  
徳永はいつも何かとフォローしてくれる。それが今はとてもありがたい。

「徳永に迷惑かけない様に頑張らなきゃなあ」  
ビールジョッキをぐいっとある。今日もビールが美味しい。  
「ぐぐぐくと喉を鳴らしてビールを一気に飲み干す。

「ふはあ、んーんまいつ！あ、私生中頼むけど…って徳永？」  
徳永のジョッキが空だったので注文するのか聞こうと思つただけど、徳永は何かを考え込むように空になつたジョッキを握り締めている。

「おーい。徳永？」  
私が覗き込むように徳永を見れば、徳永は私を見つめてきた。  
「俺、迷惑とか思つてないから。」「え？」

「別にお前は仕事が出来ないわけじゃない。凡ミスは多いけど。そもそもミスが多いのも色々やり過ぎるから出てきてるだろ。今回のだつて他のものも幾つか並行してやつていたから確認まであまり気が回らなくてミスに繋がつたんじゃないのか？自分でなんでもかんでもしようとするからいけないんだ。もっと他の人を頼つてもいい

んだよ。」

てつきりからかう様な言葉が返つてくると思っていた私は、徳永の真面目な言葉に驚いてしまった。

確かに、徳永の言つとおりかもしれない。頼まれた仕事を考えもせずに言われたから全部やらなきやと思い込んでいた。

徳永つて凄い。そう思いながら私がまじまじと徳永を見ていたので徳永は氣恥ずかしいのかみるみる赤くなつていつた。

「あーくそっ。こんなガラジやないんだよーすいませーん生中つ下さい！」

「やだ徳永かーわいーー

いつもお返しどばかりに徳永をからかつてやる。

「うつさい、可愛い言つな

不貞腐れたように言つ徳永が可笑しくて、思わず顔がゆるんだ。

「にやにやすんなよ、気持ち悪いな

「気持ち悪いって酷いなー。

「気持ち悪いもんは気持ち悪いんだよ

「何それ！まあいいですけどー。けど、徳永の言つとおりだわ。私、自分でなんでもこなせるようにならなきやつていつも思つてて。自分のキャパシティ考えずになんでも引き受けちゃつてた。入社して2ヶ月経つのに今そんな事に気づくなんてやっぱり駄目だなあ。

「まあそれに気づけただけでも良かつたんでないの？まあ気づかせてやつたのは俺なんだけどな

得意げに答える徳永にいたずら心が湧いた。

「徳永様にはホント感謝します。ありがと」

ペコリと頭を下げる徳永はまた照れたのか顔が赤くなつていた。

その後も週末ということもあり思いきり飲んだ。

終電近くに店を出る頃には私たちはすっかり出来上がりつていた。

「気をつけて帰るんだぞ」

「はいはーい。大丈夫だよー」

律儀に駅まで送つてくれた徳永に手を振つて駅の改札を潜る。

あー結構飲んだなあ。なんて考えながらホームのベンチに座った。  
11月の風はお酒で火照った体には丁度良い心地よさだ。目を瞑つ  
て風に意識を集中させていると

「あれ？ 竹原？」

聞き覚えのある声がした。

目を開けると目の前に課長が立っていた。

## きっかけは些細な事。 3

「お、お疲れ様です！」

びっくりして立ち上ると課長は苦笑しながら

「そんな畏まるな、会社の外なんだし。取り敢えず座れ」と言つて私の隣に腰掛けたので、私もつられて座った。

会社外で課長と遭遇するのは初めてで、私は酷く緊張した。どうしよう。何を話したらいいのだろう。

「…今日も残業だったんですか？」

課長がここにこのところ残業続きなのは知っていたので、当たり障りのない事から聞いてみた。

「まあな。ようやく一段落ついた所だ」

課長は背もたれに体を預けて天井を仰ぎ見るとふう、とため息を吐いた。

「竹原はなんでまだここにいるんだ？ 確か定時に帰つていたはずだよな」

そう問われてなんだか後ろめたさを感じた。

「つ…申し訳ありません」

課長が残業で残っているのに自分は徳永と飲んでいたとはとても言えず、思わず謝つてしまつた私を見て課長は一瞬、不思議そうな表情を浮かべたけれど直ぐにその理由に行き当たつたようだ

「俺の仕事が立て込んでて残業してただけだ。お前は自分の仕事を終えて退社してるんだから気に病む必要はない」

そう言つてぽんぽん、と軽くあやすように私の頭を撫でた。

不思議と悪い気はしなかつた。課長は仕事中は何時もピリピリしていて近寄りがたいオーラを出しているのだけど、前に一度私に見せたこういう優しい所があるからどんなに怒鳴られても結局は憎めないなんて思つていたら、課長は慌てて

「あっ、すまん。またやつてしまつたな」

と言つて手を引っ込めた。課長は少し気まずそうだった。

私が黙つてしまつた事を何か勘違いしてしまつたようだ。

頭位触られるの平氣なのに。やっぱりそつと言つて申し訳なさそうに

していいる課長に和んでしまつて顔を緩ませながら

「いえ、気にしないで下さい。嫌じゃなかつたですか？」

笑つてなんでもないと意思表示をした私を見て課長は安堵した表情になつた。

「ごめんな。そう言つて貰えると気が軽くなるよ」

まだまだ青いなあ、と呟く課長の声に被せるようにスピーカーが最終電車の訪れを告げた。

「あ、電車が来ますよ課長」

電車が構内に滑りこんできたので立ち上がりつたのだけど、足に上手く力が入らずフラついてしまう。

「おいおい、大丈夫か？」

すかさず課長が立ち上がりつて私の体を支えてくれたので口だけただけで済んだ。

課長から微かに甘い匂いが漂つた。

「あ、す、すみません」

座つている内に酔いがピークに達していつつで体が思つように動かなかつた。

「…竹原、酒臭い。お前どんだけ飲んだんだよ」

ふう、と怒つた様にため息を吐く課長に手を引かれて電車へと乗り込んだ。

あれ、課長と手を繋いでいる。そつといた時にはもう課長は繋いだ手を解いていて、私と課長はベンチシートにその身を沈めていた。

「竹原、いつもこんな飲み方してますか？」

あ、まづいなあこの感じ。課長から何時もの怒氣がひしひしと伝わつてくる。

思わず居住まいを正してきつちつと座るけれど、恐くて課長の顔が見れない。

「申し訳ありません。週末つて事もあつてつい…」

「ついじやないだろうが！仮にも社会人なんだぞ。そもそも、社会

人云々の前にお前は女なんだ。飲むのは構わないがそんなフラフラするまで飲むもんじやない。何かあつたらどうする」

声を抑えているけれど、語氣の強い言葉。的確な正論に私はぐうの音も出ない。

会社外でまで課長に怒られるとは。情けないやらなんやらで自分が物凄く恥ずかしい人間に思えてきてなんだか泣きたくなつた。

「それにこんな夜遅くまで飲むならタクシーを …」

課長は言葉を続けるけれど私はこれ以上聞くことが出来なかつた。仕事でも怒られてばかりで成長しない私を、課長は呆れているのかもしれない。

そう思つたら何故か胸が苦しくなつしまつて。

「…まあ気分転換に飲むのはいいが、あまり羽目を外さないようにな…つて竹原？！」

課長の驚いた声に顔を上げると、課長はオロオロと慌てだした。ぱたり。何かがスカートに落ちてきた。

ぱたり、ぱたり。頬を伝う零がスカートにまた落ちる。氣づくと涙がぽろぽろとこぼれ落ちていた。

## きつかけは些細な事。4

「あ…れ？」

「すまん竹原！きつくな言い過ぎた」

課長に謝つてほしい訳じやない。そうじやないのに、涙を止めることが出来なくて。課長に謝られた事で更に自分が嫌になる。

「謝らないでください課長。自分が、自分が情けなくて。会社の外でまで課長のお世話になりっぱなしな自分が、物凄く恥ずかしいんです」

思つていてることを口にしてしまつと心は容易く折れてしまつもので、決壊したダムの様に涙が止めどなく溢れてきた。

今までの課長に対する申し訳なさで心が一杯になる。

「そんな事気にするな。部下の教育も上司の仕事の一環だから」  
そう宥めるように言いながら背中をさすってくれる課長の手が凄く優しくて。

それがまた堪らなく情けない気持ちを煽る。

「だ、って、仕事でもつ、迷惑を、かけ、てつ」

「あーもう喋るな」

しゃくりあげて上手く話せない私の言葉を課長は遮つた。

「あんなあ、竹原は気負いすぎだ。入社してまだ1年未満、迷惑かけてなんばなんだよ。そんなの百も承知で仕事を教える。何のために俺がお前達の仕事のフォローしてると想つてるんだ。失敗したら次に生かせばいい。失敗は成功の元つて言つだろう。」

「でもつ」

「本当に気にする必要はないって本人が言つてはいるんだから、気にするな。これ以上何か反論しようとしたら次の会議でお前に集中砲火浴びせるぞ」

会議で延々細かい質問をされるのも嫌なので思わず口を噤んだ。だけど分かっている。これも課長なりの優しさだつて事。

ああ、凄いなあ課長は。そんな風に考えてくれていたんだ。

そう思つたら、申し訳ないと言つ思いと共にどうにかして課長の好意に応えたいと思つた。

私なりに、出来ることを頑張ろつ。なんでもかんでもやれりつとせず、少しずつ少しずつ出来るようにしていこつ。

へこたれている場合じやない。徳永に言われたことも参考にしながら頑張るんだ。

そう決意して、鞄から取り出したハンカチで目元を拭つた私は、ふつと肩の力を抜いた。

すると、ずっと私の背中を優しく摩つてくれていた課長の雰囲気がふと柔らかくなつたような気がして顔を上げると、課長の眼鏡の奥にある瞳は優しく私を見つめていて。私と視線が合つと笑いかけてくれた。

一度褒められた時に笑顔を見せてくれたけど、その時以外で課長の笑顔を見たことがなかつたので、私はまじまじと課長の顔を見つめてしまつた。

「な、なんだよ竹原。俺の顔に何か付いてるか？」

「いえ、課長の笑つた顔つて一回しか見たことなくてびっくりしちゃつて」

と言つと課長は苦笑いを浮べた。

「まあ職場ではいつも小難しい顔してるみたいだしなあ。いつも眉間にシワが寄つてるって言われるよ」

「ああ確かに！ いつもこう、眉間に一本皺が入つてますよね。」

私が課長の真似をしてしかめつ面になり、眉間を両方の人差し指で押し上げて皺を作る動作をしたら、課長はふつと吹き出した。

「竹原の小難しい顔は全然小難しくないな」

「なんですかそれ、私の顔に緊張感が無いみたいな言い方やめて下さい」

可笑しそうに笑いを堪える課長に抗議の視線を向けると、課長はふ

つと息を吐いてまたあの優しい目になった。

「自分で自分を追い込むなよ。何かあつたら俺に直ぐ相談しろ。その為の上司だ」

「はい…、ありがとうございます」

課長の言葉に、私の心が少しだけ軽くなつた気がした。

不意に車内放送が私の降りる駅の名前を告げたので降りる準備を始める。隣に座っている課長も降りる準備を始めた。

「あれ？課長、この近くに住んでるんですか？」

「なんだ、竹原もここで降りるのか？」

ガタガタと電車は揺れながら失速し、やがて静かに停車した。

私も課長も立ち上がって、駅の構内へと出て行く。

「まあ、ついでだから送つてやるよ」

「え、そんないですよ。私のアパートすぐそこですしお

「もう夜も遅いから一人で歩かせるのは気が引けるんだよ

「でも…」

「俺の気が済まないから大人しく申し出を受けろ」

そう強く言われたので私はその言葉に甘えることにした。

等間隔に置かれた街灯が行く先を示すように夜道を照らしている。

夜空を見上げると星が瞬いていて綺麗だった。

「冬になると夜空の星が良く見えていいですねえ」

「そうだなあ

なんて他愛もない会話をしながら歩く。今日は課長の事を少しだけ知ることが出来たような気がして少し嬉しいと思った。

考えてみると、課長の事を何も知らなかつた。その状況は今もあまり変わらないけれど、同じ部署にて新人歓迎会とかもあつたのに、ちょっと社交辞令程度に話したきりで、後は仕事上の会話ばかりだつた。

もつと前に色々話しかけてみればよかつたと少し後悔した。

「あ、こここの角を曲がった公園の近くです」

「…え？公園の近く？」

課長の疑問系の問い合わせに答えるように小走りに角を曲がって、直ぐに見える公園と、その斜め向かいにある自分のアパートを指差した。

「あれです。だから言つたじゃですか、近いって、そう言つてこりと笑いながら振り返つて課長を見れば、なんだか気まずそうに立ち止まり、私と視線を合わせた。

「あー、竹原。もう一度聞きたいんだが、本当にあのアパートなんだな？」

「ええ、そうですよ？」

何故そんなことを聞くのだろうと不思議に思いながら課長を見ていると、課長はアパートを指差して苦笑しながらこう言つた。

「あそこな、俺も住んでるんだわ」

「えつ？」

驚いてアパートと課長の指先を何回も見てみるのだけど、どう見ても課長が指差している先は私が住んでいるアパートで。

「はははっ、自分が住んでいる所と同じ方向に進むなあとは思つていたが、自分が住んでるアパートに部下を送り届ける事になるとは思わなかつたなあ」

課長は可笑しそうにくつくつと笑つている。

「ふふっ、確かにそんな事思いもしませんよね。なんだか可笑しな話ですね」

この変なシチュエーションに私もつられて笑つた。  
色々なことが起る一日だなあと思つてまた少し、可笑しさがこみ上げた。

結局、課長は7階に住んでいるとの事で、その下の6階に住んでいる私は最後の最後まで課長に見送られることになった。

「今まで遭遇しなかつたのが不思議だなあ」

「ですよねえ。こんな凄い偶然もあるものなんですね」

そんな会話をしている内に私が降りるフロアにエレベーターが到着した。

「そうだ竹原、あまり人に同じアパートに住んでいることは言つないよ?」

エレベーターを降りた私にドアが閉まらないようにボタンを押しながら課長は照れているような怒っているような不思議な表情でそう言った。

「ああ、そうですよね。社員寮ならまだしも、普通のアパートで偶々上司と部下が同じ所に住んでるって変な憶測を呼びかねませんし」「まあ、そういうことだ」

おやすみ、と言つて課長はボタンから指を離した。

「おやすみなさい、課長」

ペコリと一礼して顔を上げる頃にドアが閉まりだしたので、もう一度軽く会釈をして自分の部屋へと向かつ。

課長と変な秘密を共有することになってしまったけれど、なんだか浮かれるような不思議な気持ちになつた。

## せつかけは些細な事。4（後書き）

「これは…と思つたけどボツになつた案

「あ…れ？」

「すまん竹原…きつく言つて過ぎた」

課長に謝つてほしに訳じやない。課長に謝られた事で更に自分が嫌になる。

「謝らないでください課長。自分が、自分が情けなくて。会社の外でまで課長のお世話になりっぱなし自分が、物凄く恥ずかしいんです」

思つてこりとを口にしてしまつと心は容易く折れてしまつもので、決壊したダムの様に涙が止めどなく溢れてきた。

「そんな事氣にするな。部下の教育も上司の仕事の一環だから」  
そう宥めるよつて言いながら背中をさすってくれる課長の手が凄く優しくて。

ああ、私つてホントダメな人間。課長に宥めてもらつてゐるし。あもつ、どうしてこうなんだらう。

課長は呆れているかもしない。更に呆れさせてどうするの私！

「だ、つて、仕事でもつ、迷惑を、がげでばつがりだじいといいいいいいいうわああああああああああん！」

「ちょ、そんな大声で泣き出す奴があるか！他の人に迷惑だらう…」  
車内にいる数人の乗客が何事かと見てくるけれどそんな事はもう気にしていられない。

「泣くなよ竹原、な？迷惑だなんて思つていなかから

そう言いながら背中を摩つてくれる手は優しくて。

どうしてこんなダメな私に優しくしてくれるんだろう、と考え出したら余計に泣きたい気持ちになつた。

「うわあああああん！嘘だ、課長は優しくからそういう言つてくれてる

だけで、本当は迷惑だつて思つてるんだア あああ

「…お前、酒が入ると絡み好きの泣き上戸になるのかよ」

「違ひます！泣いてなんかいないんですからあああああああわわ

あああああああああん

「お、落ち着け、な？泣いてない！竹原は泣いていないつて分かつ  
てるから！」

なんて案もあつたのですが…、却下ですよね、そうですよね。

今日も何時もの満員電車に揺られて職場へ行く。一週間の始まり。人口密度の高い車内。あまり動くと周りの人達からひんしゅくを買いつつなので視線だけ動かして辺りを見回しても課長の姿はなかった。駅の構内でも課長の姿が見えないかと探してみたのだけれど課長は何処にもいなかつた。

まあ、乗る電車の時間が同じだつたらとつぐの昔に遭遇していたのだろうし。

そんな事をぼんやりと考えている内に、会社最寄りの駅の名前がアナウンスされたので私は臨戦態勢に入る。電車のドアが開くと同時に出口に吸い込まれるように人の流れが出来るのでそこはそのまま身を任せて駅の構内へと歩を進めた。

一番注意しないといけないのは改札を抜けた後の北口と東口への分かれ道。ここで人が交差するように行き交うので上手く避けながら東口へと向かわないといけない。

東口を抜けると後は銘々の目的地へと人が散つていいくので、ここでやつとほつと一息吐くことが出来る。

朝のラッシュは私にとつては戦場。

入社したての頃は、人の波を上手く避けられずに良く北口へと流れていったっけ。

駅を出て直ぐのコンビニはいつも混んでいるので会社近くのコンビニで何時も栄養補給用のゼリーを買う。ゼリーを飲み終わる頃には会社のビルに到着。今日も7階の営業企画部のブースへと向かう。これが何時もの朝の風景。

「おはようございます」

自分の席へと向かいながら挨拶をすると、窓際に背を向けて配置されたデスクに向かつた課長が書類から視線を外さずに「おはよう」とだけ返してくれた。

やつぱり課長は眉間に眉根を寄せて険しい顔をしている。その眉間に綺麗な一本皺。

それを見て昨日のやり取りを思い出し、少し口の端が上がってしまった。

「なに朝っぱらから一ヤニヤしてんの竹原。気色悪いぞ」  
徳永からツッコミを受けた。

「なんでもないよ」

取り繕つてそう言つてみたけれど、徳永に見られていた事が少し恥ずかしくて素早く椅子に座つた。

月曜日はいつも調子が上がらない。週末の時間の流れと週が明けてからの流れの違いに少し戸惑いを覚えるから。こればっかりは何時まで経つても慣れなくて無理矢理自分を奮い立たせて仕事を片付けていく。

12時を10分位過ぎて仕事がキリの良いところまで来たので私は社内食堂へと向かつた。

今日は給料日前なので定食セットは購入せずに、安くてお腹も膨れるカツカレーにした。

空いている席を探してキヨロキヨロと辺りを見回していると徳永が手を振つて会図してくれたので、徳永の向かいに座つた。

「来るの遅かったな」

徳永はそう言つとプレートに載つたカキフライを一つ丸々頬張つた。  
「あー、キリの良いところまでやつておいつと思つて。そしたら少し出るのが遅くなっちゃつた」

いただきます、と両手を合わせて小さな声で呴いてから私はスプーンを手にした。

「ふーん。あ、この前はちゃんと家に真っ直ぐ帰れたか?微妙にフラフラしてたけど」

スプーンに山盛りになつたカレーを頬張りながら私はどうじょうか迷つていた。

課長は同じアパートに住んでいることは誰にも言つなかつて言つてい

たしなあ。だからと言つて課長と遭遇したことを見つのはダメだろうか。

だけど私はどうしても課長の凄さを話したくて、同じアパートに住んでいる部分だけ話さなければ良いと思い徳永に昨日の帰りの出来事を話した。

「で、励ましてもらつたと？」

既に食べ終わった徳永は食後のお茶を飲んでいた。

「そりなんだよね。もうホント自分が情けなかつたよ」

私はしょぼくれながらフォークに持ち替えて豚カツを頬張つた。

「やっぱりタクシーで帰らせた方がよかつたな。しつかし課長もまた面倒見がいいと言つかなんと言つか」

そう言つて徳永は苦笑した。

「課長つてやっぱり凄いよねえ。皆の事を考へているんだよ。色々と」

「まあまあ、あの人2年前に32歳で課長に昇進したらしいけど、それがウチの会社の最年少昇進記録になつていてるみたいだし」

「えつ、何それ」

私は驚いて徳永を見れば、徳永ははあ、とため息を吐いた。

「そんなの皆知つてるよ。お前位じやないの？ 知らなかつたの」

呆れ氣味にそう言われて軽くへこんでしまう。

全然知らなかつた。私つて本当に何も知らないんだ。

「まあ竹原は自分の事でいっぱいだろうしね」

そうしけつと言いのける徳永を軽く睨め付ける。

でも本当の事なので言い返せない自分がなんとも言えず、黙つてしまつた私を見て徳永は肩をすくめた。

「本当の事言つてごめん」

「そこなにかフォローを入れるところじやないの？」

私が笑いながら拗ねた仕草をすると徳永は至極真面目な顔をして

「フォローして欲しいならするけど。あー、竹原は不器用なだけだもんな」

と言われた。

「それフォローになつてないしどうせ不器用ですよ。」

徳永を見るとても愉快そうに笑っていた。

「こういう時の徳永はとても生き生きしている。からかいで上手と言つかなんと言つたか。

仲の良い他の同期にも同じ事をしているから、特に勘に触るような事も無いのだけど。

逆に、同期として気軽に接して貰えているようで嬉しい。

「そんなんだと可愛い女の子が寄つてきても逃げられるんだからね」

私がそう言つても徳永はどこ吹く風で

「そんなヘマはしないよ。好きな女の子には優しい質でね。じゃ先戻るわ」

と言つて徳永は立ち上がった。

「はいはい、そーですね」

「仕事、遅れるなよ?」

そう言つられて食堂の時計を見れば、時計は1時5分前。

話に夢中だった私のお皿にはまだカレーと豚カツが半分程残つていて。

「そういう事は先に言つてよ徳永!」

もう既にいない徳永に聞こえるはずもない抗議の言葉を零して、慌てて残りを食べた。

## 流れ始める。2

夕暮れに沈む街はオレンジ色に染まり、朝と違つてゆつたりとした足取りの人々が駅へと向かう。

今日は、駅前のスーパーのお惣菜が安くなる日だからスーパーでお惣菜を買つていこう。

そんな事を考えながら歩いていると

「竹原！」

と誰かに呼ばれたので後ろを振り向くと課長が私に近づいて歩いてきた。

「お疲れ様です課長」そう言つて会釈をすると課長は右手を上げて「おうお疲れ」と返してくれた。

課長がそのまま歩き出されたので私も一緒に肩を並べて歩く。

「この時間に帰るのが久々過ぎてなんだか違和感を感じるなあ」

「そうですよねえ。ここ何ヶ月かずっと残業されてましたよね」右隣を歩く課長を見上げると課長は私を見て苦笑いを浮かべた。「休日出勤をあまりしなくて済んだのがせめてもの救いだったな」「ホントお疲れ様でした」

「まあ次のプロジェクトが立ち上がつたらまた残業続きになるだろうがな」

「束の間の休息ですねえ」

私がそう言つと課長は

「仕事に出てるから休息とは言えないだらつ」と溜息を吐いて笑つた。

朝と同じ位の人々が乗つた電車内。私と課長は流れに流されて乗り口と対面になつている反対のドア側へと押しやられていた。

そんな状態なものだから、課長とも必要以上に距離が近い。対面の状態で身動きも取れないからとても気まずい。

私は目線を何処に向けたら良いのか分からず、課長のネクタイのス

トライプの数なんて数えてみたりしている。

電車に乗つてからずつと、課長のシトラスと何か甘い匂いが混じつた香りが私の鼻孔を撲つてくる。

この前駅で遭遇した時も同じ匂いがしたつけ。

「満員電車も久々だな」

小さな声で課長が呟いた。

満員電車に乘る事があまり無いのだろうか。

「そう言えば課長つて朝何時の電車に乗つてるんですか？同じ所から乗るのに今まで一度も見たこと無いのが不思議だったんですね」

私も同じように小さな声で課長に尋ねた。

「ああ、会社に7時半に着くように電車に乗つているからな」「結構早めに出社されてるんですね」

だから今まで遭遇することが無かつたのかと納得した。

「課長つてホント仕事が好きなんですねえ」

感心しながらそう言うと課長は自嘲の色が混じつた笑い声を漏らし

「そんなんだから彼女にも逃げられるんだよなあ」「

と、落ち込んだ声で言った。

あ、何か地雷を踏んでしまった？

何かフォローしなきや。そう思った私は慌てて

「課長はすつごい面倒見が良いから良い人が必ず見つかりますよー。」

と言つた。数秒の沈黙。すると突然課長はくくつ、と吹き出した。あれ？私何か可笑しな事言つたっけ？そう思いながら顔を上げて課長を見上げると、課長は笑いを堪えていた。

「面倒見が良い奴が必ず良い人を見つけられるなら世の中の男は皆彼女持ちだぞ」

「えつ、あつ、そうですよね…」

フォロー失敗。こういうフォローをしようとするとき時も的はずれな事を言つてしまつ。

イレギュラーな事への反応が鈍いのも私の欠点だ。

「そう落ち込むな。竹原なりに励ましてくれたんだろう？ありがとう。

「

あ、また。眼鏡の奥の課長の瞳はとても優しくて。優しい眼差しで私を見下ろして笑いかけてくれた。仕事中には絶対に見せない表情。そう言えば「」近くにいるんだつた。

急に私と課長の距離を思い出して恥ずかしくなる。思わず顔を俯かせると、「一度車内アナウンスが降りる駅の名前を告げた。

課長が先頭に立つて進路を作ってくれたのでそんなに苦労する事もなくホームに降りることが出来た。思わずほっとため息を零す。

「あー、窮屈だつたな」

隣を歩く課長は心底嫌そうに言つものだから思わず顔が綻ぶ。

「そうですねえ。まあいい加減慣れてきましたけど」

「俺はあれには一生慣れないと」

そう言つ課長をちらりと覗き見ると、いつもの課長だつた。なぜだか少しホッとした。

「あ、そう言えば今日駅前のスーパーのお惣菜が安いんですよ」私は気持ちを切り替える為にそんな他愛もない話を切り出した。

「へえ、そんなんがあるんだな。全然知らなかつた」

「あのスーパーのお惣菜、すつじい美味しいんです。特に唐揚げがすつじいジューシーなんですよ。あとお弁当も種類が豊富で」意気揚々と語る私に課長は怪訝そうな表情を浮かべながら

「竹原は自炊はしないのか?」

と、訪ねてきた。

「あー…えつと…時々やつてます」

しどりもどりにさう答えてみたけれど実は料理だけはどうしてもダメで。

自分で作ったものがどうしても美味しく感じられず、いつもお惣菜とかで済ませる様になってしまった。

曖昧に笑う私を見た課長は一つ溜息を零した。

「竹原、今日の夕飯ウチで食つていけ。作つてやるから」

「いえそんな!お申し出は有難いのですがお手間を取らせてしま

うので私の事は気にしないで下さい！」

慌てて首を左右に小刻みに振りながらそつまつても課長は引かなかつた。

「一人分も2人分もそこまで変わらん」「でも、ホント申し訳ないです」

流石にそこまでしてもらうのはかなり気が引けるので私は辞退しようとそう言つただけど、課長は全く意に介さない様子で

「一人で食べるのも飽きていた所だ。それに料理作るのも好きだしな」

なんて言いながら駅の構内から外へと出る。

外は既に暗くなつていて家々の灯が煌々としていた。

スーパーは直ぐそこ。私はどうしたものかと思案していると、課長は立ち止まつた。

「…あー、考えたら迷惑だよな。いきなり上司の家に行つて食事をするのも」

立ち止まつて課長を見上げると苦笑いを浮かべていた。

「いえ！迷惑だなんて思つていません！むしろこちらが迷惑を掛けているようで申し訳ないんです」

私はあたふたと慌ててそつまつと課長は少しの間、眼鏡の奥の瞳で私の感情を推し量るように真つ直ぐに私を見て

「本当に？」と尋ねてきた。

すかさず私はこくこくと頭を上下に振り

「本当ですっ。私人に作つて貰つたご飯が大好きで、手作りのご飯とかもう単語を聞くだけで物凄くわくわくするんですけど、課長は上司ですし、ご迷惑になるかと思うと気が引けてしまうんです」私も誤解して欲しくないので真つ直ぐに課長を見てそつまつと課長は、につといたずらつ子みたいな笑みを浮かべた。

「じゃあ問題無いな。竹原は夕飯をウチで食べていくよ！」そつまつと言つてまた課長は歩き出した。

「あ、あれ？課長、私の話聞いてましたか？」

私も課長の後を追いかけて歩き出す。

「問題無いだろ？俺は迷惑だなんて思っていないし竹原も、一緒に食べたくないって訳でもないんだから」

「そういうモノなのでしょうか…」

私の納得していらない様子を見て課長は

「気にするな。俺が料理の腕自慢したくて誘っただけだ。料理が好きなんだけど、誰にも振る舞う機会が無くてな。そこで竹原に白羽の矢が立つただけだ」

と言った。

ここまで言われてしまつとこれ以上断るのも逆に失礼な気がして。

私は課長の申し出を受ける事にした。

課長の部屋は7階の角部屋だった。

間取りは同じなのだけど、一つ違うのは窓が一つ多い事。

それにも…。課長の部屋は片付いていることは片付いているのだけど、やや雑然としていた。

雑誌と本が部屋の隅に纏まつて積まれていたり、カウンター キッチンのカウンターの上にコーヒーメーカーや挽かれたコーヒー豆の入ったパック、お砂糖といったものがちょこちょこ置かれている。もつときちんとした部屋を想像していたので拍子抜けしてしまった。

「あー、あまり部屋の中を観察しないでくれ」

少し照れた表情の課長が言うままで私はあちこちに視線を向けていた。  
「す、すみません！」

慌ててきょろきょろするのを止めると、課長は苦笑いしながら  
「まあ、ソファーにでも座つて待つてろ」

とソファーを勧めてくれたので座ることにした。のだけど、落ち着く訳もなくて。

上司が料理をしているのに自分だけ座つている訳にもいかず再び私は立ち上がり、台所へと向かった。

「課長、何を作るんですか？」

そう言いながらキッチンに足を運ぶと、課長は冷蔵庫の中から食材やタッパーを取り出していた。

「竹原は落ち着きが無いなあ」課長がそう言いながら笑つて「先週久々に作り置きや仕込みが出来たから色々食べさせてやれるぞ。何か嫌いな物はあるか？」と訪ねてきた。

「私は特に好き嫌いは無いので大丈夫ですよ」

「そうか、なら何出しても大丈夫だな」

課長はそう言うと、五徳が2つ乗ったガスコンロにフライパンと水を張った鍋を置いて火をつけた。

そして、てきぱきとまな板と包丁を用意し野菜を洗い始めた課長を  
ぼんやりと眺めていたのだけど、当初の目的を思い出しても「何かお  
手伝いしましようか?」と尋ねたら課長は洗い終えた野菜をまな  
板の上に乗せながら

「足手まといになるからいらん。テレビでも見ていろ」と一蹴され  
てしまつた。

「うう…酷いです課長。私だって包丁くらい握れます  
すこすことソファーへ戻りながらそう呟くと課長はふつと笑い声を  
漏らした。

「竹原の場合は本当に包丁を握るだけだろ?」

「…大人しく料理が出来るのを待つてます」

まあその通りなので悔しいけれど反論は出来ない。

実家でも何回か母の手伝いをしたことがあるけれど何時も最終的に  
台所を追い出されていたっけ。

テーブルに置かれたリモコンに手を伸ばしてテレビを点けると、何  
時も見ている刑事ドラマが始まっていた。

ゆつたりとソファーに背中を預けてぼんやりとテレビを眺める。  
今日も眼鏡が素敵です。と心の中でエールを送ったり、相方とのテ  
ンポの良い掛け合いをくすくす笑いながら見ていたのだけど事件現  
場の調査が始まった頃、私にも事件が起こつた。

睡魔が私の意識を乗つ取ろうとしてきたのだ。

初めてお呼ばれした部屋で寝こけてしまうのもかなり失礼だ。と考  
えながら私は睡魔と戦つた。瞼が下へ降りようとする度に一生懸命  
瞼を押し上げるのだけど、座り心地の良いソファーに身を預けてい  
るとそれも徐々に効果が無くなってきてついには自分の頭がカクン、  
となる度に瞼を押し上げるといった状態になってきた。

不味いな、目を閉じないようにしないと

…。

不意に遠くで誰かが会話している声が小波の様に聞こえた。ポン  
ポンと温かい何かが私の頭を撫でる感触。

あ、気持ちいい。思わず口角が上がる。このまま撫でていて欲しい。

そんな思考が頭を過ぎつた後不意に甘い香りが鼻孔を撲つた。この匂い、何処かで嗅いだ事がある。そんな事を考えていたら急に唇に何か暖かくて柔らかいものが触れて……これは、唇? なんで唇が……。

その瞬間私は瞼を押し上げた。

テレビは怪しげな人物が主役の刑事に尋問を受けている場面を映し出している。

あれは、夢? ぼんやりとする頭を田覓めさせようと小刻みに頭を左右に振る。

「丁度良かった。」  
「飯出来たぞ」

そう言いながら課長はソファーの前のテーブルに座ろうとしていた。

「あれ?え、ああっ! すみません課長! 私寝ちゃつてました」

慌てて謝りながら立ち上ると、課長は特に気にする様子も無く

「そんなの知っているよ。まあ気にするな。取り合えず冷めないうちに食べよう」

と課長の向かい側に食べ物の入った器がセッティングされた場所を手で指し示した。

「あつ、はい」

変な夢を見てしまった。しかも他人の部屋で。私は恥ずかしさを感じながら指し示された場所へと座つた。

「うわ…、これ全部課長が作つたんですね?」

白米、ほうれん草とわかめの味噌汁、みじん切りにされたキャベツの上に乗つた豚肉のしじみが焼き、人参とじぼうのきんぴら、大根と人参が千切りになつた酢の物、レタスにきゅうりとトマト、粉チーズが乗つたサラダ。

家庭的な料理が私の目の前に繰り広げられている。

「俺以外に誰が作るんだよ。ほら、食べる食べる」

そう言いながら課長は両手を合わせて「いただきます」と言つた。

「あつ、いただきます」

私も両手を合わせると、お箸を手に取つた。

まずは生姜焼きに手を伸ばす。

美味しい…。お肉の中までタレの味が浸透していくほつぺたが落ちそう。お肉も丁度良い焼き加減で、思わず顔が緩む。

「どうだ、味は？濃くないか？」

課長はやや不安げな表情で私の様子を伺っている。

私は勢い良く首を横に振り「いいえ！すっごく美味しいですっ」と勢い良く言つと、課長は私の勢いに驚いたのか目を瞬かせると、ふつ、と笑い「そうか、なら良かつた」と言つて、眼鏡の奥の瞳を優しげに細めた。

またあの瞳だ。不意に電車での記憶が蘇る。と同時にシトラスの混じった甘い匂いも思い出す。

さつきの夢の匂いは課長の香りだ。それに気づいた瞬間私の顔は熱くなつた。

なんて夢を見てしまつたんだろう。私はこみ上げる羞恥心を押し殺すように、料理を味わうことに集中した。

食事を食べ終わつた後食後のお茶を少し飲んで、私はあまり長居するのも悪いと言つて課長の部屋を後にした。部屋に戻るとほっと溜息が漏れる。

ちゃんと普通に振る舞えていただろうか。食事の間会話を交わしていたのだけど、何をしゃべっていたのかあまり覚えていない。少し心配なのだけど、課長も特に私の様子を訝しむ事も無かつたのでそこは大丈夫だろう。

それにもしても、あの夢は一体何。私は思わずソファーに倒れこむ。妙にリアルだつた夢。唇の感触が蘇つて思わずジタバタとソファーの上で身悶える。

「はあ…」

なんだか妙に疲れる1日だつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4090y/>

---

些細な事。

2011年11月20日03時53分発行